

〔書評と紹介〕

長谷川成一編

『津軽・松前と海の道』（街道の日本史 3）

金森 正也

本誌編集部依頼でこの原稿の執筆を引き受けたものの、読み終えて後悔することとなった。本書は「書評と紹介」をするのがたいへんに難しい本である。内容が乏しいとか難解だとかいうのではない。視点は斬新で質的にも充実している。ただ、既成の概説書や通史に慣れた頭が、その編集と構成にそって述べられる語り口になかなか追いついていけないのである。もちろんこれは当方の責任であって、本書の執筆者の責任ではない。が、このことは、本書の（そして本叢書の）特質にかかわる点であることをまず述べておきたいと思う。それほど、本書の構成は特徴的なものとなっている。

本書は、吉川弘文館によつて企画された叢書『街道の日本史』の第三巻にあたる。巻末の「刊行のことは」にあるように、この叢書のねらいは「地域史の提唱」にある。ここで言う「地域史」とは、要約すると、上から設定された行政区分に従った歴史叙述を拒否し、地域住民の主体的・自立的な活動を通して形成された生活・文化を足場とする地域の歴史像の構築、ということである。換言すれば、地域とは、生活の場を異にする人々の往き来とそれによつて生じる、もの・情報の交流によつて

形成された場・空間ということであり、「街道」は、その交流を象徴する語句として用いられている。したがって、本書の評価は、そのような叢書の意図がどれだけ達成されているかにかかっていると見える。

本書は、次の三部構成からなっている。

I 津軽と松前を歩く

- 一 津軽・松前の地理と風土
- 二 西浜街道と津軽平野
- 三 津軽半島と松前・江差

II 北方への窓

- 一 北方世界の自立を求めて

- 二 近世海峽地域の形成

- 三 近代青函地域の発展

III 北方世界と民衆の交流

- 一 覆る縄文のイメージ

- 二 民衆の移動・アイヌとの交流

- 三 海峽地域の文化と芸術

IV 津軽・松前地域の歴史と日本史

あとがき

まず、I「津軽と松前を歩く」は、本書が対象とする地域の概観である。一「津軽・松前の地理と風土」では、対象地域の地理的特徴が述べられたあと、これを弘前城下・津軽平野中央部、西浜地域、五所川原・金木の新田地域、青森・外か浜、松前・江差を中心とする海峽の北側の地域、の五つのブロックに分けてその地域性が概説的に述べられる。

二「西浜街道と津軽平野」では、弘前から鯉ヶ沢・深浦を経て大間越に至る道筋、浪岡から十三湊を経て小泊に至る道筋にそった地域の歴史が、縄文時代から近世までの長い時間の中からポイントをしぼって紹介される。三「津軽半島と松前・江差」では、いわゆる羽州街道にそって北上し、海峡を渡って松前・上ノ国・江差に至るルートにそった諸地域の歴史と文化が紹介される。

Ⅱ「北方への窓」では、基本的に時間軸にそって各節が立てられ、それぞれの地域間の交流と、それらが結びつくことによってより大きな地域が形成され、自立していく過程が述べられる。一「北方世界の自立を求めて」では、縄文時代から古代蝦夷の世界のありようが近年の考古学の発掘成果に基づいて述べられ、さらに中世の「館」の時代に至る地域社会の動向が論及されている。特に津軽安藤氏と十三湊の盛衰、また浪岡に拠った北畠氏と北方との関係などが、それぞれの発掘成果によりながら論述される部分が説得的である。続いて二「近世海峡地域の形成」では、Ⅰで概観された各ブロックを中心として近世における地域的展開のあり方が述べられる。なかでも、地形上の変化による十三湊の変質とそれに対応した「十三小廻し」と呼ばれる回船の活躍に関する説明は、岩木川河川交通と鯉ヶ沢の機能とに関連させながら述べられていて説得力がある。また、青森湊の成立が、本州アイヌの動向を見据えながら津軽氏の支配が確立していく過程での政治的意図に基づいた成果であるとされる。絵図「羽ノ木沢ヨリ小泊迄」の表示の中に、海峡地域の道筋に対する当時の人々の認識が認められるという指摘は興味深い。このほか、北奥からの出稼ぎ人「ヤン衆」の動向が詳しく説明され、円空や真澄な

ど海峡を越えてその足跡を残した人々についても述べられている。三「近代青函地域の発展」では、青森県の設置時における松前（館県）の合併と離脱などの政治過程、りんご・米・ひば等の地場産業の形成、昭和恐慌時の大凶作等が具体的事実に基づいて述べられている。内容的には、青森りんご生産が土族授産のひとつとして始められたこと、「軒先まで国有林」とされた状況下での大場篤三郎らによる山林下戻運動、または津軽地方の地主が松方デフレに起因することなどの記述が印象に残る。以上のほか、陸羯南らの思想活動に辺境からのまなざしを指摘し、地方主義の胎動を見ている。

Ⅲ「北方世界と民衆の交流」は、そのタイトルが示すように、海峡地域の人々・ものの交流を軸として論述される。ここでも基本的に時間軸にそって節立てされているが、よりテーマ性が全面に押し出され、各項で取り上げられる事実関係の時間的流れはほとんど関心の外にある。まず一「覆る縄文のイメージ」では、近年衆目を集めた三内丸山遺跡の解説を中心として、北海道・岩手・秋田にまたがる広域的な人・ものの交流のあった事実が指摘され、さらに犬走須恵器や擦文土器の分布などから地域的連帯が指摘される。二「民衆の移動・アイヌとの交流」は、近年の北方史研究の成果が最もよく示された部分である。海峡地域に近世社会が成立していく過程が、本州アイヌの動向などをも含めて説明され、一方ではアイヌの風俗・文化が根強く北奥社会に存続したことが指摘される。また、山丹交易に関連して、青森県内での「蝦夷錦」の発見事例や、蘇州産であることを示す織り込み文字発見の事実について述べた部分は興味深く読むことができた。近世後期の問題としては、場所請負制

度の展開によってアイヌの社会的存在形態が大きく変化すること、あるいは藩の政策に反して松前稼ぎを組織化する青森町人の存在など、蝦夷地の経済的变化にもなつて、民族的矛盾が深化していくことや、行政の枠をこえて地域社会が結びついていく過程が述べられている。三「海峽地域の文化と芸術」では、文学・思想・絵画・民間芸能が取り上げられる。とりわけ、津軽三味線が、警女や座頭など身分制度の最下層におかれた民衆の苦しみの中から誕生したことの説明は、芸術というものの本質を考える上で重い指摘である。四「津軽・松前地域の歴史と日本史」では、近代化遺産としての建築や文学運動が取り上げられる。そして、海峽地域が近代国民国家に組み込まれていく過程にふれながら、その歴史的意義を指摘して本書が結ばれる。

以上、紙数の都合もあつて足早に紹介してきたが、本書に盛り込まれた内容の豊富さは、到底以上のような紹介で尽くせるものではない。本書のねらいが冒頭に述べたような「地域史」の構築にあるとすれば、本書は充分にこの要請に応える内容になっている。この点を、本書の特徴的な点を整理することで確認してみよう。

まず第一に、本書の叙述が、北方世界との交流が、原始から近代に至るまで当該地域の歴史と文化の展開を規定している、という視点を一貫させているということである。人・もの・情報が海峽を越えて往き来することが、地域形成のモメントとなり、人々の意識・思想もそのことから大きな影響を受けたと見る。この視点は本書の随所に生かされ、時間軸という従来の歴史叙述の支柱をもたない構成の中で、ともすれば分散しがちな事項を連接する役割をはたしている。

第二は、一点めに関連するが、従来の通史や概説書の構成を大きく離れた、全く新しい型の叙述構成が試みられていることである。これは、本書の目的である行政区画の相対化という点に関連している。それは、各章・各節にわたつて、いわゆる「藩政史の概説」に陥ることを意図的に避けている（と思われる）ことに強く示されている。同叢書の他巻ではあえて「藩政史」にあたる一章を設けたものがあるが、これでは本書の意図は達成できないであろう。行政的まとめ、権力的意図から出る行政のありようなどが従来の通史の機軸であつたとすれば、これにかわる支軸が一点めで指摘した視点だからである。本書が以上の課題に取り組み一定の成果をあげたことには、もちろん近年の北方史研究の深化という条件が少なからず反映しているのだが、さらに、執筆者に地元で活動が続いている若手研究者を起用したことが大きいように思われる。このことによつて、これまでの豊富な研究成果を取り入れつつ、既成の枠組みにとられない編集と叙述が可能となつたように思われる。

最後に、若干のわがままな感想を述べて結びとしたい。一つは、本書の特性上やむを得ない点であるが、各節で取り上げられる事項が、他の章や節の記述と重複している部分が少なからず見られるということである。例えば、浪岡城、十三湊、青森湊、蝦夷地出稼ぎなどを扱った記述にそうした傾向が見られる。ただしこれは、本書の編集・構成の特徴ともかかわることなので、いちがいに本書の欠点とすべきことではないのかもしれない。第二に、地域民衆の活動の取り上げ方が著名人にかたよりすぎているという印象を受ける。津軽三味線の創始者とされる仁太坊のような人物を初めとして、全国的規模では無名ながらも、地域に

根ざして多様な活動を続けた人々をより多く取り上げたり、あるいは民俗分野を取り上げること、より地域史像の幅を広げることができたのではない。第三の点は、「海峡地域」とはいうものの、どうしても津軽側から見た地域像という印象を拭えないことである。前近代の出稼ぎ、鮮漁、山丹交易、アイヌの動向など、テーマによっては違和感なく「海峡地域」を受け入れられる部分は少ないのだが、節によっては最後の松前についての項目が配されているだけという印象を受ける部分もある。四点めは、結論部分についての感想である。末尾に近い部分で、青森県が近代国民国家の構成員となることで後進地を脱しようとしたことは、同県が蝦夷（アイヌ）同様であることを否定して独自の地域を形成しようとするものであり、それはまた、中央中心の近代化に呑み込まれていくことでもあった、と述べられている。このような評価は、簡潔で、理論的にはたいへん理解しやすいのだが、やや図式的すぎる気がしないでもない。当時の青森県民には蝦夷としての自己認識が見られたとされるが、これは一般民衆レベルで広く実証できることなのだろうか。北奥（人）＝蝦夷（人）とする認識は、知識人による一種のレトリックとして示されている場合が少なくないのではないか。文学作品や講演記録等の場合は、とりわけそうした傾向が強いことに注意する必要がある。

以上のことは、私の勉強不足や読み込み不足を棚に上げた勝手な感想であり、本書の画期的な構成と論述の成果に敬意を表したうえのものであることを申し添えておきたい。何度も述べたように、本書は、本叢書の提唱する地域史の要請に十分応えているし、何よりも、北方との交流

という視点を一貫させることで、日本を同質の生活文化を有する単一族国家とする見方に対して、おだやかながら鋭い批判の書となっていることを高く評価したい。また、その地域に立つて思考しなければ見えない歴史像があるのだということを示してくれる点で、壁にぶつかりながらもそれぞれのフィールドにこだわりつつ研究を進めている人たちに、ぜひ一読していただきたい一書である。

（四六判、二六三頁、吉川弘文館、二〇〇一年一月刊、二三〇〇円）

（かなもり・まさや 秋田県公文書館員）